

〔譜雙五〕事始

雙陸劉存馮鑑皆云、魏曹植始製考之北史、胡王之弟爲握槊之戲、近入中國、又考之筮具、雙陸出天竺、名爲波羅塞戲、然則外國有此戲久矣、其流入中州、則曹植始之也、

〔和漢三才圖會十七〕雙陸略○中

按類要云、雙六乃出天竺、涅槃經名波羅塞戲者是也、然則始於胡國者佳也、日本紀云、持統天皇令禁雙六、則可知本朝雙六始先於圍碁也、然未知誰人傳來也、

〔本朝世事談綺三〕雙六

梁武帝天監年中日本へわたす、本朝二十六代武烈帝に當る、

〔宴曲抄上〕雙六

夫雙六の基は、遠西天の古より、近く東土の今に至まで絶ざる、翫様々の品を顯はす、○中是を陰陽に象盤の局をきざみては、此十二廻に象かるが故るに、則其名を雙六とよぶとかや、三十石を並ては、黑白月の一廻十五の石を分立、簍に又十二の目を定、十二時に拵して、行度は筒の中をば、夜とし、外に出事は晝とす、情其風を思とけば、勝負を互にあらそふ様、世のわたらひの端も、皆、浮も沈もとにかくにあざなはれる繩の、一筋に思さだめん方ぞなき、○下

〔譜雙三〕平雙陸一名契丹雙陸

凡置局、二人、白黒各以十五馬爲數、用骰子二、據彩數下馬、白馬自右歸左、黑馬自左歸右、凡馬盡過門後、方許對彩拈出、如白馬過門擲六二、即出左後一梁、左後五梁、馬遇他彩亦然、拈馬先盡贏一籌、或拈盡而敵馬未拈贏雙籌、

〔兔園會集說〕雙陸

思ふに、馬は今云いし石のことなり、

山崎美成